

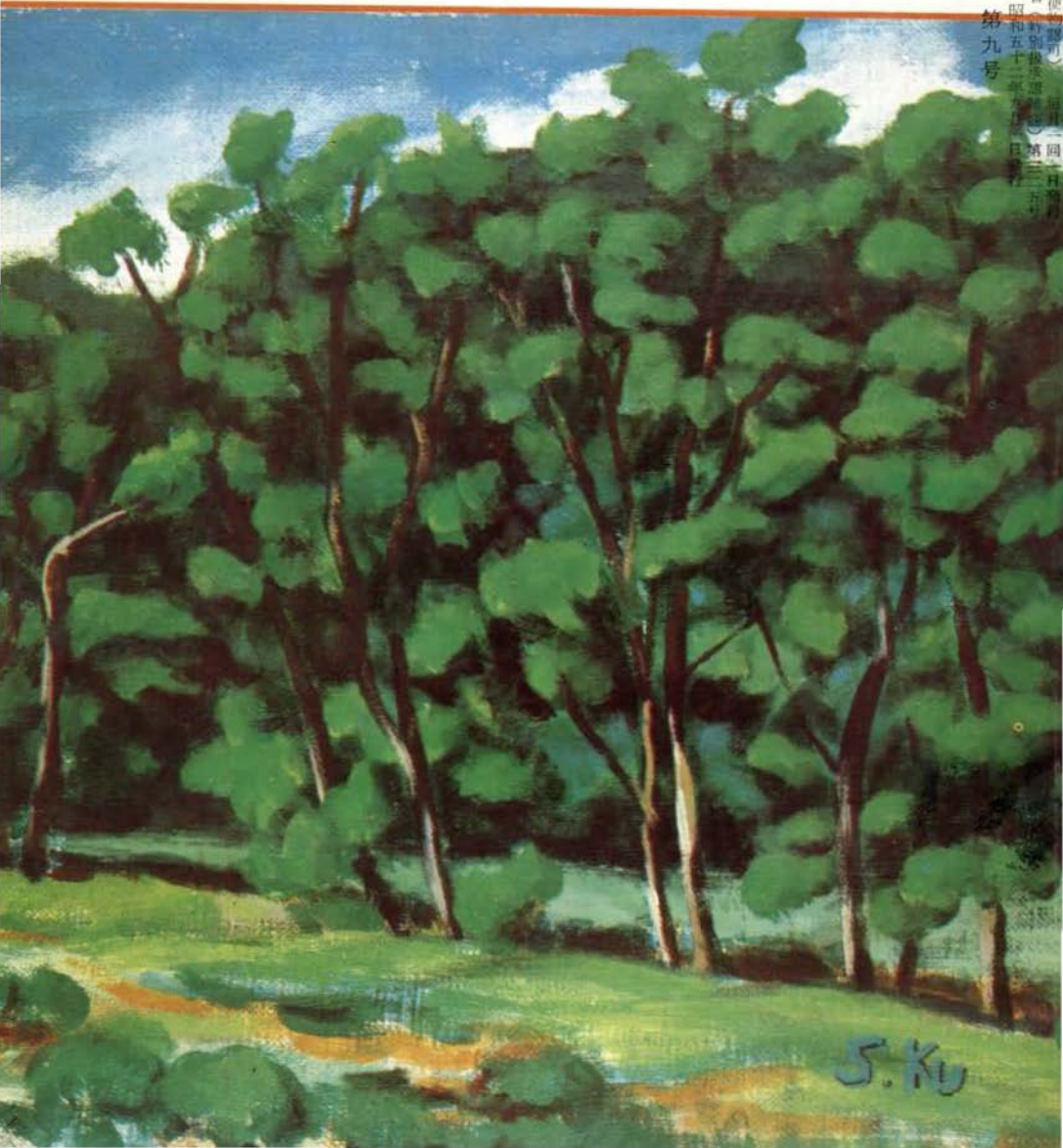
淨土

1977 - 9

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受通知）第三二五号
昭和五十二年八月二十五日印刷
昭和五十二年九月一日發行

第四十三卷

第九号



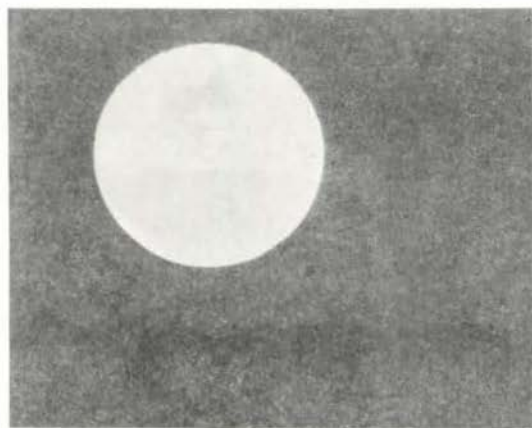
J. Ku

名 月

夏には海や山に出かけて太陽の光を満喫する人が多い。都会のコンクリートの路上に照りつける日の光にはいささか閉口するが、海や山で日光を身体一ばいに浴びるのは爽快だ。八月が太陽の季節なら、九月は月の季節とでも呼びたい。月は秋を代表する季の詞で、月といえば秋をさすと古来定められている。月の満ち欠けに基づいて作られる陰暦では、月の満ちる十五日を十五夜といい、とくに八月十五日を仲秋の名月と呼ぶ。

「太陽」と「月」、この二つに、昔の人々はどのようなイメージを抱いていたのだろうか。そして現代つ子はどうか。今そんな詮索はできないが、とにかく人間が多大の恩恵を受けるこの二つには、いろいろな神話や伝説が生

れ習俗がある。『古事記』には、伊弉諾命いざなのみことの左の目から天照大神、右の目から月読命つきよみのみこと



が生れたといい、『日本書記』では、日月二神が仲たがいでいて昼夜を隔てて住むようにな

つた話が記載されている。仏教でも、大日如来とか月光菩薩とか名づけて、太陽や月の光に喩えてその人格や精神を表象する例は多い。とくに、浄土宗では月に縁が深い。阿彌陀仏の救済があらゆる人間にふりそそぐありさまを、月の光に喩えた「月影の歌」は、法然上人の教えを端的に表わしたものとして名高い。

月かげのいたらぬさとはなければども
ながむる人のこころにぞすむ

知恩院門跡岸信宏親下は、この「月影の歌」で大切なことは、「月の光を眺めて美しいと感ずることの行が伴うことで……そこに月と、その月を眺める人との接触があり、お念仏によって、仏と衆生との出会いが生れる」とお述べになつてゐる。月を美しいと感じる心が大切であつて、そういう心から人と人との信頼関係も生れる。美しいと感じる心がなければ、十五夜の月も名月にならない。

(佐藤成順)

九 月 号



浄土門といふは、浄土にむ
まれて、かしこにして煩惱
を断じて菩提にいたる也

——『登山状』

目 次

法 話

豊かなる旅路……………羽 田 修 果……(2)

ジューイ・サイド・クリフ……………服 部 仙 順……(6)

＜人生読本コーナー＞ふだん記のすすめ……………橋 本 義 夫……(19)

＜ふるさと紀行＞私たちの念仏道場唐沢山
信州諏訪・唐沢山阿弥陀寺……………洪 谷 賢 応……(24)

いのちを考える⑥＜老い＞

生と死——「死の判定をめぐる」……………杉 靖 三 郎 ……(10)

老いに就いて……………吉 原 自 覚 ……(14)

信じ求めるころ

インドの古典『パーガヴァタ・ブラーナ』より……………小 山 典 勇……(28)

＜随想＞緑蔭法談(一)……………伊 藤 一 義……(34)

＜表紙裏・巻頭言＞名 月……………佐 藤 成 順

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

一 彼岸法話 一

豊かなる旅路



はね だ しゅう か
羽 田 修 果

(浄土宗東京教区教化団長
東京・向丘願行寺住職)

○ 秋の野や草の中ゆく風の音

(芭蕉)

木犀の花の香りが芳しく辺りに漂っています。紫苑、秋海棠、野菊も咲き始めました。

芙蓉の花が萎む頃となりますと、夕空に沢山の星が輝きを加え、やがて月も出てきます。肌打つ風も冴えて爽やかに心地良い。

秋は、いつも人の心を静かに落着かせる好季節であります。

爽涼の気を感じるこの頃に迎えるのが、後彼岸のお仏

事です。

お彼岸会は、我が国独自の仏教行事で、その昔諸国の国分寺に於て、春秋の二期各々七日間に亘って、お経を誦したり、懺悔の法を修するなど特別の修法を行ったことを基として、その風がいつの頃か一般の間に及んで、修行に加えて先祖を祭る慣しとして行われるようになったと謂われています。

○ 天王寺後の彼岸の人出かな

(芭蕉)

お彼岸の中日は春分、秋分で暦の上では、太陽が真東から、真西に沈む時であります。古来から、その日が落日により西方を正しく知ることが出来るというので尊ばれてきました。

洛南の浄瑠璃寺、宇治の平等院、大阪の四天王寺など古寺の伽藍のたたずまいなどは、夫々こうした考えにもとづいて建立されていると伝えていきます。中でも四天王寺のお彼岸会の参詣者の賑いは古来より有名で、その西門に立つて落日を拝む者は極楽世界に直面して正しく阿弥陀如来を拝むことが出来ると大変尊ばれてきました。

法然上人も南都遊学の砌り、暫くこの寺に留まられたことがあったと伝えられておりますので、恐らくは、この賑いを御覧になられたことでありましょう。

後に善導大師の観經疏を繙かれて、浄土念仏の教えをお聞き下さった上人のお心の奥底に、この大衆帰依の賑いが何がしかの影を宿されたのではないかと思われてなりません。

○ 旅人と我が名呼ばれん初しぐれ

(芭蕉)

時候が良くなると人々は旅に心を馳せ、日常の生活を離れて大自然の中でたまには、のびのびしたいものだと考えがちです。

旅に出て人々は日頃の計算の世界から脱けだして無心の世界に遊び、しばしば日常の迷いと苦しみを忘れま

す。
近頃、探墓と称し直接に縁のない人でも歴史上有名な者や、何かの故事に関した人々の墓詣りをすることが盛んになってきました。

人々はその墓頭に立つて、それ等の人々やその人のあった時代のことなどあれこれと思い偲んで心をその時代に遊ばせるのであります。まして御先祖の墓参、或は縁者の墓に詣るならば、夫々亡き人のことが思い出され、在りし日の面影などが目前に浮んできます。

そうしたことから云ってお彼岸は心の旅路であると申せましょう。

また、しばしば人生そのものは旅のようなものであると評されています。

俳聖芭蕉ぐらい人生をきびしく見つめ旅の人生に徹した人はいないといわれています。

有名な紀行文「奥の細道」の冒頭に「月日は百代の過客にして行交ふ年も又旅人也」と支那の詩人の言葉を借りて、世は流転であり全てのものが同じ状態にとどまらないこと恰も旅の姿であるといっています。

四十一才の第一回目の行脚から元禄七年五十一才最後の旅の途中大阪で客死すのまでの間、旅また旅の生涯を送ったと伝えられています。

み仏を拜み、先祖を偲び、亡き人々を思い浮べて報恩感謝し、深く自らを反省するお彼岸のお仏事は人生の旅の間にくぎりを与える尊い行事であり、人々は旅中旅の心の旅路に明るいひとときを味わうことが出来る有難い慣しであります。

○ 渡し呼ぶ人は我なりはつ時雨

(芭蕉)

迷いの世界とさとの仏の国との間には聖なる河が横たわっており、その河を渡らなければ仏の国に行けないと考えられています。

此岸から彼岸に渡ろうとつとめることがお彼岸の意であります、この語は梵語の波羅蜜（パーラミター）を訳

した到彼岸から来たと謂われています。このことからお彼岸のお仏事としては、仏道修行の眼目である六波羅蜜を行ずることが肝要であると教えられています。

六波羅蜜は六度ともいい、布施、持戒、忍辱（にんにく）、精進、禪定、智慧のと勝行を謂います。

布施とはほどこしであり、慈心を抑えて、他を育て養うこと、即ち財施と法施の二つがあり、物質的（金銭的）ほどこしと、教えを他に示して、さとし導く精神的ほどこしを挙げています。持戒はいましめ、規律を守ること、自己をきびしくして、よく善行を保ち行うことで、諸悪莫作、衆善奉行は仏教の根本とされています。忍辱とは能く困難、障害に耐えて、和の心で協調を計りものごとを達成することであり、精進は修行に怠りなく励み、間断なく専心勤めることであり、禪定とは静慮ともいい、正座観法、心を静め精神活動を寂靜無心の境に保つことであり、智慧は世間の利害計算の分別智を離れ、仏道修行にもとづく無我の大般若、仏智を磨き培うことであるとされています。

度は渡の意で六度つまり彼岸に渡る船として挙げられる六波羅蜜はどれをとりあげても賢く尊い修行であり、

大切な心身の修養徳目であります。

つとめはげむこと、善をなすこと、たえしのぶことみな我々にとり大切なことであり、行わなければならない要目であります。

しかしながら、仏道修行として要求されておりますことは成仏のための修行でありますから、日常の修養徳目の範圍を越えてきびしく徹底して修練され、勤行されねばなりません。厳しい修行のもと、これ等の船にのり、自ら船頭となり、棹を握って、彼の岸に渡ることとは仲々大変なことであり、きわめて困難な難行道であります。

「浄土門」というのは、この娑婆世界をいとひすてていそぎて極楽にうまると、かの國にうまるとする事は阿彌陀仏のちかひにて人の善惡をえらばず、ただ仏のちかひをたのみたのまざるによる也、このゆえに道綽は浄土の一門のみありて通入すべきみちなりとこのたまへり、さればこのごろ生死をはなれんと思はん人は証しがたき聖道をすててゆきやすき浄土を願うべき也、この聖道、浄土をば難行道易行道と名づけたり……易行道は海路をふねにのりてゆくが如し、足なえ目しいた

らん人はかかるみちには向うべからず〔聖道門〕ただ船にのりてのみむかいの岸にはつくなり」

〔法然上人御法語〕

宗祖法然上人は、み仏がこうした力おとろえたものの為に特別な船を探して下さって、私どもの前におかれたとお示し下さっています。その尊い船が阿彌陀如来の本願のお力であり、お念仏であると教え導いて下さいました。

その船は、船頭もいらなく、自ら棹すこともなく、み仏のお力で太い綱をわたされて、ひっぱり導いて頂けるのでございます。

極楽においての御先祖さまも、御一緒にその綱を引いて下さっておられることでございます。

こうして、み仏も、御先祖もともに同行となつて下さって彼の岸へすすむお念仏の旅路こそ心豊かなる旅路と申してよいでしょう。

古来より尊くうけつがれたお彼岸会を迎えましては、到彼岸の尊い渡し船を心に浮べて、日頃に倍して、声高からかにお念仏をお唱えしていただきたいものでございます。



シューイ・サイド・クリフ

はっ どり せん じゅん
服部 仙順

(東京・本郷昌清寺住職)

昭和五十二年七月七日はサイパン島玉砕三拾三周忌に
当り、東京小石川源覚寺三好上人より慰霊法要の導師の
依頼を受け七月六日羽田を立ち、グアム島のタモンビー
チのリーフホテルで一泊し、早朝コンチネンタル機でサ
イパンに飛ぶ。真紅の南洋桜の並木を通り、曾ては繁栄
をしていたと云う、ガラパンの町マイクロビーチのヘア
フアダイホテルに着いたが素朴な感じのする村である。

七日正午遺族の方々より三十分早く、法要の準備のた
めマイクロバスで北端のマツピー山に向う。雑木林を走
って行く右に防空壕らしきものが処どころ見受けられた
が雑草で蔽われている。この雑草木は戦後種を飛行機で
播いたもので、もう三十三年もたっている。坂を登りは

じめた。いよいよ山頂を近づいた気配、暑さも忘れ法要
が無事につとまります様に念じた。

バスから降りた時、雨が降りだしたので法要は無理か
と思われたが不思議に雨はあがった。山頂は千坪ほどあ
るかと思われる平地に南洋群島物故者平和慰霊塔が建立
され、その上に日本の方に向って安置されている弥勒像
は、小石川源覚寺の南洋群島協会が建立の弥勒像と相向
い合っている。その後背には円の上に十字架がある。奇
異に感ぜられたが、怨親平等の意味か、島の人々がキリ
スト教徒である故かとも思われた。祭壇の中央に木の位
牌を安置したが風が強いのて倒れる。倒れれば又直す有
様、各団体より花環が供えられ、浄土門主よりも猷華さ

れたが風が強いので固定するのに一番苦労をした。遺族参拝団の方々の内地から持参の酒等の供物が台の上につまれ、浄土宗よりは香が献ぜられた。

南洋群島地域物故者諸霊三拾三周年慰霊法要は一同合掌黙祷により始り、式は差定によつて進められた。道場を清める洒水、五色の道場散華はガラガラと照りつける碧空に高く舞い上った。導師の追悼の疏が読まれ、遺族の代表は日本の発展を報告し、英霊安かに眠って下さい、日本の将来に加護あらしめ給えと慰霊の詞をのべられた。心からなる誦経念仏修するところの功德を以って諸霊位の証大菩提の為に追善回向し、読経中に百名の焼香はすみ、増上寺より贈られた大きい散華と、私の寺の先代渡辺義遠上人が日支事変以来戦死者一人一人の冥福を念じ乍ら名号を清書された五色の散華を法要中に香に薫じその大小二百余枚の散華を遺族参拝団の人々に海に流して頂く様にお授けして法要を終った。

像の右手前の処にシュニー・サイド・クリフ（自殺の崖）がある。遺族参拝団の方々は並んで「海行かば」の歌を涙ながらに斉唱されたが、当時を回想され悲しみに充ちた声であった。ここは米軍に追い詰められ八〇〇フィ

ト直下の岩頭めがけて全員が身を投げ国の為に殉ぜられた場所である。私は衣の着替えをするのに時間がかかりこの崖に立つ事の出来なかったのが心残りでした。

太った中年の現地人の女のガイドを乗せたバスは坂道をくだって、バード・アイランドに着いた。戦前は日本人が月をながめた処で、月見島と呼ばれていたが、玉碎の日以来鳥がむらがって血は岩にしみこんだ。それ以来小鳥の島と名が付いた。左折したバスは太平洋の塔（ペンザイ岬）で止った。シュニー・サイド・クリフの下で、海に面した絶壁の処で万歳をさけんで殉ぜられたところ、その当時はこの附近の海水の色が変色したと言われている。又日本軍最後の司令部跡がある。艦砲によってか岩崖の中腹の部屋の左右の厚い壁が貫通されている。平地の石畳の上に中部太平洋の碑が建てられ、さきの大戦に於いて中部太平洋の群島及び海域で戦没した人々を偲び平和への思いをこめてこの碑を建立する。昭和四十九年三月二十五日、日本国政府」と刻まれている。道路を隔てて観音像一体が安置されている。海際に大小二つの合掌型の慰霊塔の上の台座に、大小の親子観音が安置されていたが今は無くなっている。この処でも遺族参

拜団の方々は海に散華をなげて弔っていた。私も寺の檀信徒の戦死された方の、戒名を書いた三十枚の散華を遙か下の海に流して冥福を祈り、先代老師の念願であった名号を南方の陸に海に、今日散華する事の出来たことを有難く思いました。

因みにサイパン島は昭和十九年六月十五日に米軍の上陸舟艇第一波七百隻にて陸海合せて六万人が上陸し、七月七日に日本の陸軍二万二千七百が斉藤義次中将(自決)、海軍七千が南雲忠一中将(自決)の指揮にあった計三万



人、島の人一万人が玉碎した。サイパン喪失の結果東条内閣は辞職し、これによって第二次世界大戦に於ける日本帝国終焉の端緒であったと米誌は報じている。

パスは中部の西海岸を走っている。ここは米軍が上陸した処であるが、波静かで美しい浜辺でメリケン松が茂っている。曾ての砂糖王、松江春次氏の銅像のある、その手前に大きな教会があり、神社の石の鳥居をくぐると島の人たちの十字架の墓地在左右に並んでいる光景をパスの窓からながめた時、サイパンの歴史を物語っているように思えた。

ヘアファダイホテルの砂浜を港の方へ五分位歩くと、浄土宗南洋寺の跡に行く。石の門柱が二本立っている。左の門柱に浄土宗南洋寺と彫み弾のキズが残っている。板の柵があつて入れない様になっているが、右の方からは自由に入れる。中にこの頃お地藏様が安置されたが現在コンチネンタルホテルの敷地の様でテニスコートが造られている。少し離れた所にある本願寺跡もタガントガンの密林である。

軍艦(マナガハ)島はタナバック港より、グラスボートに乗ってサンゴ礁の海底を見ながら二十分位で島につ

く。遠くから見ると軍艦の形に見えるところから、この名前がついたのである。椰子、タガタガンなどの雑木が茂っていて、十八分位で一周の出来る程の小さな無人島で、真白な砂、透き通った海水で一番美しい。この島に大砲が二門頭丈なトーチカの中に据付けられ南の方に向いている。明治三十八年呉工廠の製造で、その一つは爆弾で粉碎され、太い鉄筋が赤く錆て風雨に耐えている。上陸用舟艇らしきものが白い砂浜にさびて坐りこんでいる。すんだ海の水、泳ぐには最高であるが、帰路グラスボードが、行きつ戻りつしているので不審に思っていると、突然海底に沈んでいる大きな両翼無傷の戦闘機が両眼に迫って来た。隣りの遺族の方が思わず念仏を申され、目がしらが熱くなって合掌をいたしました。仏がああの下の操縦室で、白骨となって私達を守って下さる様に思われた。

ホテルに帰り、みどりの芝生の垣根に紅くもえて強烈な南国の太陽を背に南洋桜に負けじと咲いている、仏桑華（ハイビスカス）三輪をカメラに収めつつ祈念したのである。南洋桜は毎年咲き、仏桑華も野にも山にも咲き続けてほしい。十月よりサイパン直行の定期便が飛ぶこと

になるが、サイパンは永久に静かな島であってほしい。七月九日グアム島のジイゴの慰霊塔に参り回向をいたし、赤い土の石段を雑草をよけながら降りて行く。雑木林に蔽われた深い洞窟の奥を偲びつつ合掌。

「浄土」教化トラクト

『ひがん会』

B6判・表紙共八頁

定価一部二十円

送料実費

○いつものように、どうか弊会へのご協力という意味でも、宜しくご注文をお願いします。

発行 法然上人鑽仰会

いのちを考える

(六)

— 老

い —

生と死

— 「死の判定」をめぐって



すぎ
杉 靖三郎

(東教大名誉教授・医博)

私たちは、「生きている」とか「死んだ」とい
い、生物と無生物を区別している。それでは、生
とは何か、死とは何か。生物と無生物を区別する
「生命」とは何か。生命とは、死とは、とひらき
なおって尋ねられると、返答には困るであらう。
だが、私たち誰もが、「自分は生きている」と
信じており、「自分は死んでいる」と思うものは
あるまい。生きていることを、体験し自覚してい

るからである。この生命の自覚（体験）こそが、
実は、「生きている」「生きていない」（あるいは
「死んだ」とか「死んでいる」を区別している根源
なのである。

「この虫は生きている、この草も生きている」
といい、虫や草にも生命がある。というが、よく
考えてみると、これも「自分の生きている」とい
う体験・自覚にてらして、そういつているのであ

る。生物学や生理学というものの、この「自分が生きている」という自覚が、基礎になって、成り立っているのである。生理学者ペーリスが、「虫の生命、草の生命など——生物の生命は、自覚された生命（自分の自覚 Perception of life）の破片にすぎない」といっている。

この「自覚の生命」、さらには体験の生命こそが真の生命である、というわけである。しかし、もともと、私たちひとりひとりの体験や自覚は、客観的な言葉で表現できるものではない。禅で「生は不可思議」（生命は思議〈考察〉できないもの）であり、「言詮不及」（ことばでは言い現わせない）といわれるゆえんであろう。

私たちは、「生きている」とことは、誰もが自覚し、生を体験しているのであるが、死を体験した者は、一人もいない。「死」についていろいろ言われても、それらは、つまり、体験にもとづかない想像であるに過ぎない。生が不可思議である以上に、死は不可思議である。「未だ生を知らず、いづくぞ死を知らんや」（孔子）といわれるゆえん

であらう。（生そのものは私の対象ではなく、体験の当体であるので科学以前の「宗教の問題」でなければならぬ。）

人は、生まれて、成長し、……老衰して、死んでゆく。病氣や事故、けんかや戦争などで死ぬこともあるが、生をうけたからには、かならず死ぬのである。これは、生物すべてに見られるので、「生あるものは、かならず死ぬ」とか「人は死ぬべきもの」といわれるのである。これは、「死とは生きているものが、生きていなくなること」といえよう。

ところで、人にとって、生の終りと死の始まりが、何時であるか、生死の境界点は何処か、ということが、問題になってくる。医師の間では、「死の判定」についての慣用的な基準がある。「意識の喪失、自発呼吸の停止、心拍の停止、瞳孔の散大と対光反射の消失、筋肉の弛緩など」である。とくに、「息をひきとる」とか「脈が触れない」とかといって、死んだことを表現する。だが、

息が止まり、心拍が止まっても、生きかえることもあるので（仮死）、これだけでは死んだことにならない。それで死んだ者が、もう生きかえらないことを確認するために、特別の理由のない限りは、二十四時間後になって、死体の処置が行われる。（なお、法医学では、死後硬直とか死斑形成をもって、死の確徴とする。この確率は、一〇〇パーセントである。）

ところが、このような、これまで問題にならなかった、死の判定に対して、再検討をせまられる事態が起ってきた。その一つは「心臓移植手術」（一九六七年十二月三日南阿のケープタウン病院で、バーナード博士が、はじめて行った。できるだけ早く、心拍がとまる前に心臓をとり出す必要がある）でありもう一つは、いわゆる「植物人間」（器械の力を借りて意識喪失状態のまま呼吸と心拍を維持させられている「生ける屍」）を、どう処置するか、ということである。

人間（一般に個体）の死後も、臓器や組織や細胞は、「生きて」いる。交通事故などで、脳がくし

やくしゃに破壊されて死んだ場合にも、心臓は、はやく摘出したものは、刺戟すれば搏動する。このような「生きている」心臓を切り取ることは、殺人行為ではないか。また、医療技術の進歩とともに植物人間はますます多くなるが、意識回復のあてのない者に、蘇生器や人工栄養補給を、いつまでも使っていることは、生命の尊厳の冒瀆ではないか。また、このような場合、蘇生者のスイッチを切ることは、殺人行為であるのか……。

このように、「生と死の判定」をめぐる、深刻な論議が展開されている。ここで問題になるのは、動物や植物の生や死ではなく、私たち人間の生とは何か、死とは何か、その生と死の境界点を、どこにおくか、ということである。

一九六八年の第二二回世界医師会総会では、「死についての宣言」を行った。その中に「我々の関心は、細胞や臓器の生きていることではなく、人として生命 (the fate of a person) である」とある。

この人としての生命とは、人格者としての生命、つまり、私たちのあらゆる精神活動を生み出し、もろもろの行動を操っている神経系の中樞（大脳の機能）のなかに、求められるはずである。そこで、人間の死の判定として、従来の「心臓死」（心臓停止）に対して、新しく「脳死」を採用すべきか否かについて論議されている。

すでに、ローマ法王ピオ十二世の「延命」（“The Prolongation of Life” 1958）についての声明がある。この中で、「長い期間、人工的な手段で生の機能が維持されている深い昏睡状態の患者では、靈魂はすでに肉体から去っている」と述べ、心拍が停止する前に、蘇生器のスイッチを切ってもよいと示唆している。

このような割り切った考え方は、欧米でも、反対はあるが、われわれ日本人の一般感情としては、「生きながら心臓を抜きとる」ということは、「殺人の身ぶるい」を、おぼえる人もあろうが、大部分の人は、死者が「浮ばれない」と思うであ

ろう。彼我の死生観は、ひどくちがうもので、欧米では、死体は、たんなる物質であるようだが、我々にとっては、遺骨に対しても、冥福を祈らなければならぬのである。とにかく、「医学の進歩」にともない、人工蘇生術・安死術・中絶・ピル・人工受精・試験管ベイビー、さらには遺伝子の組みかえなどが開発され、人間の生命が、器械的に操作されるようになって、いろいろむずかしい問題がおこってきた。……そして、今や、安楽に死ぬことも、かまわなくなってきた。『人間に未来はあるか』（テイラー）と案じ、警告も出されている。

なぜ、こんなことになったのか。

つまりは、人間の生命（生死）の根源をはなれ、生物的生命（息をし、心臓がうつ……）を求めて、ひたすらその「生に執着」して、「死を無視」しようとしてきたからではないか、と私には思われる。西洋でも、死とは何か、という考察は、数多くなされている。古くから「メモント・モリー」（死を忘れるな）というラテン語の句がある。これ

は、^{どくろ}骸骨のような、人の死（恐怖）を想起させるようなものを指しているのだそうだが、これとはちがう。

生と死とを分けて、生を、死を、と追求するのでは、「いたずらに生死の因をもとめて、解脱の道を失へり」（道元）に堕してしまふのである。「生死一如」の生、そして死を、体現してゆくことである。……そして、「安楽に死ぬ」ことは、「安楽に生きる」ことではなければならない。……「死んだつもりになってやれ」というのは、死を

老いに就いて

老生は大凡一カ月の予定で、先年右腕骨折の後

おそれなければ、思いきって懸命にやれるのである。……「安楽に往生する」というのも、生死を越えて、「生をつくし、死をつくして」行じてゆくとところにある。『正法眼蔵』の「生死の巻」を読みかえしながら、このようなことを考えた。そして、仏教こそは、生の体験・自覚を、もっとも深いところからとらえるものであり、生命の科学（生理学・医学）に携わる者にとっても、なくてはならぬもの、と思っている。



よし はら じ かく
吉 原 自 覚

（東京・芝常行寺住職）

遺症を完癒致したい一念で、ラヂウム鉱泉で名高

い甲州奥多摩増富温泉津金楼つがねろうの一室に籠居し入浴療養中ですが、東京芝公園妙定院在住の長女美智子よりの電話で、鑽仰会依頼の原稿諸否の問い合せに対し取敢えず応諾の返事は致しておきました。処、原稿紙の廻送がおくれ二十九日の夕方入手いたしました。が締切が八月五日とあるので、不自由な右手使用の原稿書きが気懸りになりましたが氣をばげまして兎にも角にも間に合わせようと決意し、提案の老いについて所感をのべる事に致しました。旅先の混雑中の宿でもありますので御諒察を願います。

人の盛りは七、八十の威勢のよい歌もありますが、九十の坂を越して見ればいくら元氣でも周囲に旧知がいなくなつたのが何より寂しく天下に友をもとめ探しても何んの応えもない。私は戸籍面では、明治二十年一月四日生とありますので過ぎし九十年を取り除いて昭和五十二年四月十四日を再生の日として近親数十名を招き、自らの誕生祝をさせて頂きました。

廻首九十有一年、凡愚底下長夜夢
忽聽願王招喚声、正念相續住慈懷

九十年を一筆に拘断して、今日以後如来の愛子となり正念相續して如来の家に精進させて頂くという愚案で御座います。今後幾歳まで生きられるか先きの事は薩っ張りわからないが、東西辨へぬ赤坊であるので宜しく頼みますと、右の愚感を色紙に認めて贈呈致しました。出席の長老は六十歳を筆頭に昨年誕生のヒ孫（母代り）迄一人残らず祝辭をのべて呉れました。これを「ビデオ」におさめおきました。子孫達には私の比のつねの言葉を形見としてのこしました。と申したのはある詩人が、「幼時に於ける慈母のみちびきは、成長の暁、有名な世界の三つの大学を卒業するに優る」との言葉を想い出したからであります。私事になります。すが自誠のため少々回想させて頂きます。

私には三人の姉妹があります。寺族に生れましたから誕生の時既に父は自覺と命名して居ります。男はたった一人でありますので成育の暁には

僧侶として後継者とする考えは充分あった事と思われませんが段々と学を卒えると共に父は自分の生家が漢方医であった事から、また僧侶として経済的な欠乏感もあつたことと想察しますが、稍々考へも変わって坊主にするより医者にしようとして寺の惣代の長男が長崎市の医専を卒業して開業しているので入学の手順等を問合せて居ることなどを母は感づいて烈火の如くり、父の意見が齟齬して来たのである。寺で生れて寺を去ることは忘恩も甚だしい、三人の娘は職業の選択も自由で支障ないが、一人の件だけは僧侶で出世させねばならぬと頑として同意をしないのである。高等二年を卒へた許りの少年としては方向の判断に苦しんだ。父の意見も解るが、母の熱情にも動かされた。流石の父も母の剛情には打ち克てなかった。翌々年十四歳の時父に連れられて九州福岡市に近い箱崎に在る宗門経営の第八教校に入学することになった。母は欣喜踊躍した小生の前途を見守る唯一の監視者であつただけ、細心の注意も忘れなかつた。ユーモア豊かな母はお針仕事の傍談笑裡に

斯様な話もした。「昔から出家、侍に二言ないという諺もある。うそをつく様では真人間になれない。うそだけは言わぬことにしましょう。父も母も昔から侍の家に生れた。そして妾はお寺に嫁した。然らば侍の子孫出家の子であるから、ほんとうにうそのない様にしましょう。僧侶としては尚更のことである」と言い、朝夕のご本尊前への礼拝称名は必修課題であつた。これを怠る様では御機嫌が面白くなかつた。ご機嫌とりにも本当に顔を出すことであつた。偶々休暇などで帰寺すれば私の好きなおはぎ(九州の田舎ではぼたもちという)など沢山つくつて悦ばせて呉れた。時には私のそばに近寄つて「学校では有難い教えが沢山ありましょう。母にも話して下さい」とせがまれた。「偉い和尚様になれば天子様にも近寄りお話しあける事も出来る、一生懸命に勉強しましょう」と、何につけ激励の言葉であつた。昔の事で学歴はなかつたが頭脳は鋭敏であつた様で読書、算術、裁縫と花、琴、三味線などの心得もあつた。寺小屋式にあつめて多くの門弟をもつていた。壇家の

取扱ひも親切で物惜しみせず接待をした。寺院には何時も五、六名の小僧さんがいた。使用人も二、三名いた。子供達あわすれば大眷族であった。吾が子の様に大事に面倒を見た。何れも一人前となり、堀川達隆は鹿児島県国府の寺を復興し今は鹿児島県下の高級寺院となっている。立川真教はハワイ開教に二十五年の貢献をなした後開教総長にも累進した。未亡人はハワイ、ホノルルに女学校を建設し多年の功勞により海外功勞者として叙勲された。山口隆誠も同様ハワイ開教を永年つとめた。娘あい子は、太田秀山と婚し多年ハワイ開教に貢献し帰国後更に朝鮮に進出し稀有の開教事業家として小学校設立、幼稚園、病院授産所、青壮年教育等に協力し、その感化をうけた子供達、二名の医博を出し、秀三は市會議員として貢献し今は宗議として奔走している。殊に父に習い堂宇の復興、育児等にささげている。

母あい子は先年天寿を完うし八十六歳で帰西した。私の系統は母の遺伝が多い様である。女生の中に学位を得たもの数名、医大教授に任官された

病院の部長などもしている。外に対してもその影響とも見られる知名人もある。女性母の感化の偉大なることを痛感する。亡き母は「口癖のように、虚をいうな、念仏は忘れるな」と言われた、簡単で明瞭である活ける聖学の宗教教育者なりと推賞してもとがめは受けないと思います。誰れよりもこの私を著しき脱線より救いあげ曲りなりにも、宗門及び社会への奉仕をなし得る程度まで、護り導いて頂いたのは、偏へに母のお影であると衷心感激の涙をささげるものであります。六十五歳で往生したのは永い人生とは言えない。併し充実した犠牲奉仕の生涯であった。自分達が聊さかでも応分の奉仕者となり得たのは亡き母の威徳と申し度い。

話題はちょっと変わりますが続いて一言申し添えたいと思います。私は晩年自然療法、温泉療法が吾が身に適応すると思い、時折入湯静養を致します。入湯の客は青年男女も若干あるが、大方は四、五十代より八、九十代の男女が多い。いわゆる湯治客であるので永い逗留者が多い、お互いに病

気の工合や年齢なども談^{かた}り合う。同病相憐れむの情であろう。私の歳をきいて意外に驚く人がある。人によつては二十年も若く見る人もある。手足の後遺症^{うしじょう}で内臓発作の持病がないこともありましよう。比較的皮膚血色が病人色でない。この様なことから直ぐ出る質問が健康法の問題である。私は素直にお答え致します。愚鈍^{しやうたん}だから詳細なお答えが出来ないが、極めて平凡な答案であります。即ち、栄養、静養、修養のこの三者を健全な常識判断で「コンデンス」致すことである。三者何れも大切であるが、それにも加減^{かへん}がある。栄養が大切だと申しても過量では害となる。静養が貴いと申しても、静養の方法が情理^{じやうり}具備^{きうび}せねばならぬ。第三の修養、第一、第二は一応解るが、その修養ということがはっきりしない。一口にいえば栄養静養の改善研究が即ち修養と申してもよいでしょう。栄養静養の充分な人が必しも健康であり長命であるとは、世の多くの事実の上から申されないう。極めてデリケートの問題であるがその関係調和の如何であります。この観点^{かんてん}から、私は三養で

も修養第一と申し度い。釈尊の別名として、大雄、調御、天人師等の別号があるのは釈尊は、物心一如、内外一如、万有相関の事理を深く広く体験味証^{りき}して、一切の調和を完うなされた、それで調御者と申します。左様な表裏^{ひきうり}、内外、色心の実相を把握して総合的に指導なされ又実証、実現されたから、英雄中の英雄であるといふので、大雄という別号があります。

三養を理解し味証するのにも、唯だ単に唯物的視方では駄目^{だめ}、又唯心的見方だけでも駄目。お釈迦様の、物心、色心、内外、不二一体観^{いつたいくわん}の上から処理してかからねばならぬ。この事は風呂の中で短時間に了解会得^{かいとく}する訳には行かぬのであるが、ここに誰でも会得し、実践し得る妙法がある。それはまさに、「南無阿弥陀仏」と唱える念仏による修養法であるが、それは又、他日表白の時期に譲りましょう。ともかく老生九十一歳、甲州増富の鉱泉の入湯静養に吾が老いし一夏を過している次第である。



ふだん記のすすめ

はしもとよしお
橋本義夫

(ふだん記全国グループ主宰)

(一)

私は今年七十五歳なんですが、毎朝自転車に乗って、本を配ったり、小包を運んだり、町中を走り回っております。これは、私が十数年前にはじめた「ふだん記」という文章の書き方のグループでまとめた本や雑誌を配っているもので、私はその「ふだん記」グループの主筆兼小使といったところです。私が文章を書いたなどという、人は笑いだすでしょうが、私は小学校時代から学

校は好きでなく、十二、三歳のころになって言語障害にかかってしまつて話すのも容易にできなくなりました。それでも本が好きになつて、自分でも本を書こうなどとも思うようになりましたが、このころの文章は美文、名文という類いのものが多く、私たちにはとても書けるような種類のものではありませんでした。

ところが五十歳になりましたものだから、「人生五十年」という言葉もあるように、まあ書き置きといふか、そんなようなつもりでなにかと文章を書きはじめた

ようなわけなんです。最初は地方新聞などに投稿したんです。それが活字になって、実際に誌面に載る、だんだん重くなって、私のようなものでも一応自分の文章が書けるようになってきたわけなんです。

その文章というものは、あまりむずかしい字を使わないで、現在の生活の心境とか、まああるがままに、そういうなれば紋付、袴ではなく、ふだん着を着たような、そんな文章を書いたんです。それが結構読めるんですね。ともかく私のような無学のもが文章を書いた!! これは大きなショックでした。五十五、六歳になって、そういう驚きを感じたんです。

それで私は、自分のようなまあちょっとした体験なんです。これも生来の私の性分で、他人様にもすすめるようになったんです。この私の呼びかけに応じてくれる人たちも、またあったわけですし、多くは家庭の主婦の皆さんでしたが、結局は七、八人のグループができたわけなんです。そして、彼女たちに日頃のありのままのこどもをとにかく書いてみるようにすすめたわけなんです。できた文章は、私がローカル新聞などに運び、刷り上がった新聞をまた私が配るといった具合でした。もと

もとは、回覧ノートを順番に回しながら、それに皆さん方の思い思いの文章を書いていただいていたわけですし、そのノートに「ふだん記」という名前を付けたのはじめなんです。

大体、「ふだん記」というのは、そうした主婦の方々や私たち一般人の生活記録というような案配でした。しかし文章に書いてみると、それが私たちの心の反省になったり、相手の気持ちなども考えられるようになり、ともかくお互いの生活の恰好の反省の場ともなったのです。それは個人だけの反省ではなくて、みんなの素直な心情の交換といったような働きもしてきたんですね。それはたいへんな喜びであり、今まで感じなかったようなことまで、気持ちが変わるようになったんです。

ともかく上手に気取った文章を書く必要はないわけです。なによりも気取らないで、ともかく筆まめになることです。気取ってしまうと、虚勢を張って、作意的になり、つまり正直ではなくってしまふんです。だから、気を楽にして素直に正直になると、劣等感もなくなり、卑屈になることもなく、いよいよ他人の神経や振舞いに気を取られることもなくなり、また人生が楽しくなるん

ですよ。

(二)

だんだん「ふだん記」が広まりまして、全国に文友ができるようになったんです。また「ふだん記」の基本的な考え方は、まず手紙を書くこと、それも速く書くこと、文章は最初はヘタに書くこと、といった具合です。そんなようなことを掲げてはしまったのが、次第に大きな仲間を作って行ったのです。

この中で、福島県の白川郡の材木屋のおばあちゃん、吉成ウメさんは、今年九十歳になられました。この人が「ふだん記」に入られたのは、八十二歳の時でした。それから書きだされたのですが、数年前に出した文集『ふだん記——八十歳を越えて』というものの中に、「母」という一文を載せておられます。今、その文章をちょっと朗読してみましよう。

「母は名をコトといった。神経がこまかく、心配症で、子供のしつめも他のお母さんより厳しかった。たとえば、立居振舞いにもいろいろと注意されたし、お

掃除のとき、はたき、をはけるにも、『障子の紙の部分にかけると紙が弱るから、この組合わせの目の十文字のところにかけなさい。板の間にぞうきんをかけるとき、指の方でかけると力が入らないから、手のひらの方でかけろんだよ。お鍋をみがくときもこの通り』と、注意された。そのころ、この地方では石けんなどみることもできず、洗濯には白米のとき汁を使った。よくよく、汚れものときはあくで洗うのであった。母の洗濯はあくぬけして、白いものはまっ白にあがるので、『どうしてでしょう』と聞くと、『すすぐとき、布をもむばかりでなく、ビュッと軽くしぼりながらすすぐと、布目に水が通ってきれいに仕あがる』と、教えられた」

こんな吉成さんの文章なんです、このおばあちゃんの文章は貴重な文化財のようなものです。誰が読んでも興味のつきない生活の教えが潜んでいるんですね。

また八王子に住んでおられる尾股惣司さんは鳶職なんです、この尾股さんの文章は、鳶の人の話し言葉などがそっくりそのまま書かれています。まあ江戸時

代の気風が今に生きているような具合で、世間の人々からも高い評価で与えられているようです。それから長崎県の五島列島の漁師のおかみさん、海端俊子さんの文章などは、その地方の話言葉などがそのまま文章に移されているんですね。

普通の人が文章なども書かないでなんにもしないと、大体その地方の片隅で人生が終ってしまいます。これが小さくとも文集を出してみると、大体全国に拡って、手紙のやり取りなどとして、本当に自分たちの世界が拡がって行くんですね。それは、自分たちの心もまた拡がって行くことになるんですね。

こうした文章は、また生活の記録になっているんですね。年寄りや、いろんな職業の人たちが、それぞれの経験の世界のものをありのままに書くことは、また歴史の貴重な証言にもなっているんですね。こんなことは最初は思いもよらなかったことですが、こうした民衆のささやかな生活記録が、今では高い文化的資料としても認められてきているのです。

(三)

私は現在、「ふだん記」というようなささやかな文章グループを主宰しているわけなんです。これが地域社会の人々の心を交流させ、全国の地方の人々とも結ばれるようなものになったんですが、私はいろいろな方々の影響によって、はじめ自分の人生というものを踏みしめてくれたように思えるんです。

昭和三年ごろに、多摩少年院長であった太田秀穂という先生がこの八王子の住んでおられました。この太田先生は親切で、暖かく、地域の人々からたいへん尊敬されていました。太田先生は、「借金をしない」というのがモットーで、この借金というのはお金の借金ばかりでなく、手紙などの返事もかならず出さなければならぬ、というようなことで、ポケットにはいつも返事を書くためのハガキが入っていました。ですからこの太田先生のポケットに入っていた手紙というものは、いつもクチャクチャしていたわけです。太田先生のこうした姿勢は、「人間はいつ死ぬかわからないから、なにごとによらずぐにやっておこう」という考えからでした。この太田先生の哲学は、私の現在の流儀にまことに大きな影響を与えております。

もう一人の忘れられない方は、大正のころ八王子の町でお医者さんしておられた野口君平先生です。この野口先生は、自転車で町々や村落を往診されるので有名でした。今日、私が自転車で本を配ったりしているのも、この野口先生の流儀に従っているようなものです。ともかく野口先生は、診察の折などでもわからないことはわからないとして、薬なども決して余分なことはせず、ともかくまことに正直で高潔な方でした。私が『ふだん記』をはじめまして、「文章はなんでも正直がいいよ。正直が一番だ。正直話が一番値打ちがある」と申しまして、他人様から割合に喜んでいただいておりますのも、この野口先生のおかげであると思います。野口先生の正直無比の愛の教えを、私は決して忘れることはできません。太田先生も野口先生も、私たちの地域におられた人でした。このようにどなた様の地域にも、あるいは職場にも、かならずや自分がみならわなければいけない人がおられるはずです。そういうすばらしい方々を発見することは、また自分のすばらしさを見出すことにもつながるからです。

いずれにしても、自分の住んでおる地域、自分の勤め

ている職場、あるいは自分の生活しているその場所、その場所を、ともかく大切にすることですね。それはいわば自分たちの文化なのです。その自分たちの文化を守ることは、この文化を広いところに光らせるようなことになるからです。自分のその文化を光らせることは、結局、自分を光らせることにもなるのです。

私は七十五歳を過ぎましたが、今後ますます自転車に乗って町を歩き回り、町のよさをさらにみつけて、なにごとか少しでも土地のためになして行きたいと思っています。

〔文責編集部〕

今回掲載させていただいた「ふだん記のすすめ」は、文集『ふだん記』を主宰しておられる橋本義夫さんのお話です。橋本さんは東京都八王子市にお住まいで、大正時代の終りに「農村図書館」を作られるなど、戦前から地方文化のためのさまざまな活動をしてこられました。文集の『ふだん記』の運動は多くの参加者を集めて、地域社会の人々の正直なあるがままの姿を記録して、今やすぐれた歴史の証言として評価されています。このお話は、七月七日（木）から九日（土）にかけて放送されたものです。

ふるさと紀行

私たちの念仏道場唐沢山

—信州諏訪唐沢・法因山阿彌陀寺



のう けん や しぶ
広 賢 谷 洪

(茅野市心光寺住職)

諏訪に住む人びとにとって、唐沢山は自分の菩提寺とは別に、なつかしい寺であるのです。と申しますのは、春、四月十五日より五日間、大回向会がとめられ、私たち身うちの、それも近年に亡なられた新亡精霊の白木の位牌を納めにゆく寺であるからです。

唐沢の御回向がはじまりますと、新亡精霊の白木のお位牌を肩に背負い、おご馳走をお重に詰め、家内中で嶽門より登る人の群が後を絶ちません。賽の河原の地藏尊を左に見、開山彈誓上人の瓜彫りの名号石を右の川原に拝み、幡隨院白道上人の三尊名号石の前を通ってけわしい山道を左に折れますと、左上に観月堂が見え、真生会が建てました供養塔が真白く輝いています。そして手を切るような清水、加持の水が岩間を流れるその上に鐘樓堂が聳え、その後の巨岩には十一代の徳本上人、十二代の徳住上人の名号石が、念仏道場の聖地を示してそそり立っています。あえぎあえぎ登る人の群は必ずと云っていい程この加持水で手を洗い、口をそそぎ、そしてこの霊水を飲み、鐘樓堂の鐘を打つのです。老杉古松の間よ

り降りそそぐ木漏日は山道に花の輪を描き、蕭々と落ちる滝の音は行く者の俗塵を払い、頭上を覆うかとせまる岩壁は俗臭を拭い去る思いです。近年銅葺きとして整備せられたで本堂がこの上にあり、ご回向中念仏の声が絶えません。このご本堂の前を通りぬけに登ると、この寺の発祥の所、岩屋堂が安置せられていて、十一面観世音がまつられているのです。

唐沢や岩間に結ぶ観世音

誓いの水は汲めどつきせじ

信濃国三十三番の内第二十四番のご詠歌にございます通り、この岩屋こそ靈感身に迫るものがあるのでございます。

諏訪の人びとはこの聖地に今は亡き人の位牌を、眼下に眺められる諏訪湖と、新緑と、鶯の声を楽しみつつお重箱の蓋をとるのでございます。

○

寺伝によれば今から約三百八十年前、文禄四年（一五

九五）高島城下桑原村（上諏訪）の郷人、河西浄西という念仏行者が六十一才の折開基し、後四年、慶長三年、尾張の国海辺の里人、彈誓上人が諸国修行の途、諏訪を訪れ開山となられたと伝えられています。彈誓上人は人も知る有髪、木食の念仏行者で全国の靈地聖地に念仏道場を開いて歩かれた方で、この地に五ヶ年間滞在せられ、唐沢山の外信州各地の開山となり、後武州を廻り、京都洛北大原の里古知谷に光明院阿弥陀寺を開き、慶長十八年五月、その地に於て遷化せられました。

この開山上人の念仏聖者の流れがこの寺の特異な捨世的念仏行者の伝統を礎き上げたことは申すまでもありません。歴代の御住職に徳本行者、徳住行者、宮沢説音大僧正、説演上人等、高德の方々が董せられ、またこの地を訪れて念仏の行を積まれた方々には光明会の先達弁栄聖者、共生会の師表推尾博士等、枚挙にいとまはございません。

現にただいまは、光明会、真生会の別時念仏の道場に、また近年は大正大学の伝導実習の道場にと、お念仏をはげまされる方々のまたない会所となっているのでございます。

○
このような寺歴をもつ唐沢山ではございますが、私はこの唐沢山に親しむたびに次のような二つの感慨をもってお参りをさせていただいているのです。



信州諏訪唐沢山

岩屋堂

○
その一つは、この諏訪市のすぐ近くにあつて、今では車を使って二十分そこそこのこの地に、全く俗気をはなれた聖地が、よくもまあこのように開かれ受けつがれてゐるものぞという驚きとよるこびを味わわせていただくことでございます。大都會の俗気をいとい、つかの間でも大自然の中に身を投ずべく、アルプス等の登山を志す人びとも年間幾十万とおられることです。しかしながら、新聞、テレビで報ずるように、アルプス槍ヶ岳の頂上は、人、人、人で立錫の余地もないそうです。しかもこの山頂までの道程は決してたやすいものではないでしょう。しかるにこの唐沢山はいま申す上諏訪の駅より二十分の地にして、この奇岩と清流の淨域があり、しかもお念場の道場として諸上人の名号石にかこまれ、周囲にはいささかの俗化もございません。春は新緑、秋は紅葉、特に私の紅葉は近年すばらしく、夕日に映えるもみぢの姿はさながらお浄土でございます。この寺に泊めていただいて夜となりましても、麓に街の灯も見えません。諏訪湖の向う岸の村々の灯がチカチカとまばたくのみでこ

ざいます。朝ともなれば山鳥たちが私どもの眠りを覺まし、車の騒音もクラクションもございませぬ。これがこのお山の有難さでございます。

○

いま一つはこの寺には常住するご住職がいらっしやらないということでございます。勿論この寺は、下山しますとすぐそこにあります諏訪市正願寺さま宮沢説雄師の兼務せられておられるお寺でございます。諏訪一円を信徒とするこの寺も、その維持運営は正願寺さま並びにそのお檀家がこれに守っておられます。したがって正願寺さまのお檀家の方々は、正願寺とこの唐沢山と、二ヶ寺を維持担当せられておるわけでございます。事実正願寺さまの檀徒総代は本寺を四力年、唐沢山を四力年、計八力年おつとめになり、正願寺さまご自身も、ご自分の晋山式よりもこの唐沢山の大修理を優先させておつとめになりました。それにもかかわらず、このお山を私たちのために開放して下さいます。私たちはいつでもこのお山に登り、案内もこわずに本堂にお参りし、当然のことのように庫裡でお留守居のおばさんからお茶を頂

戴いたします。この寺の山門ともいふべき嶽門をくぐればもう念仏の同行人です。それがハイキングの親子ずれであつても観光のアベックさんであつても話す言葉に親しみがあふれます。このことは他の観光寺では味わえない風情です。今日もお参りさせていただいて二組の家族のハイキングに会いました。

「夏休みのハイキングですか」

「はい、ここまで登るとすずしいですね」

「お山でお弁当ですか」

「はい、楽しみにしています」

きつと留守居のおばさんにお茶を入れてもらつてお弁当を開くことでしよう。

そのおばさんに尋ねました。

「お山は冬は寒気がはげしく、梅雨ときには湿気がひどくお体は別状ございませんか」

「はい、それを心配してお山に参りました。おかげさまでに五年たちますが病気がちの私が風邪一つひきません。これもみ仏さまのお慈悲とみなさまのご親切のおかげと思います」

おばさんは、このように話しておられました。



信じ求めるこころ

— インドの古典『バーガヴァタ・プラーナ』より

小山典勇

福德あるシユカは語りました。

冬季の最初の月に、牧人ナンダの牧草地の娘たちは、
バターで料理された食事を食べながら、カートヤーヤニ
ー女神崇拜の誓戒を実修しました。

日の出にカーリンディー川に水浴した後、水辺で砂の
女神の像をつくり尊敬しました。

芳香ある花輪、香、灯明、供物、いろいろな捧物、若
芽、果実、穀物を用いて。

「女神よ牧人ナンダの息子クリシユナを私の夫にした
まえ」と真言を呪するかのように唱えながら、供養しま
した。

こうしてクリシユナに思いをかけた娘たちは、一カ月
の間、誓戒を実修しました。ナンダの息子が夫でありま
すようにと女神を尊敬して。

夜明けとともに、娘たちは互いに仲間と腕をくんで出
発し、カーリンディー川に水浴に行きながら、高らかに
クリシユナの栄光を歌いました。

ある日川に到達するといつもと同じように岸辺に衣服
を脱ぎすてて、クリシユナの栄光を歌いながら、喜ん
で、水辺を散歩しました。

クリシユナはこのことを知って、同じ年の少年たちに
囲まれて、娘たちの行為を成就させるために、岸辺にや

ってきました。

娘たちの衣服を手にとると、彼はすばやくカダンバの樹に登りました。そして他の笑っている少年たちと一緒に笑いながら、次のように冗談を言いました。

「ここに登ってきて、めいめい自分の衣服を取りなさい。私はまじめに言っています。冗談で言っているのはありません。というのも、あなた方は警戒によってやせ衰えています。」

私はかつて嘘を言ったことはないし、今も言っていない。ここにいる少年たちが知っている通りです。だから一人ずつ、あるいは皆と一緒に私から衣服を受け取りなさい」

クリシュナへの愛情にみちた娘たちは、彼の冗談に気がつき、恥かしがり、お互いの顔をみあわせて笑っているばかりでした。しかし水中から出て行きませんでした。

このようにクリシュナが冗談を言っている時でも、その冗談によって心がうっとりして、彼女たちは冷たい水中に首まで沈んだままで心ときめかせて彼に言いました。

「道理にはずれたことをしないで下さい。私たちはあなたが牧人ナンダの息子であり、私たちの愛人となるべき人、また牧草地で賞讃されている人であると存じております。震えている私たちに衣服を与えて下さい。」

私たちは気持の上ではあなたの召使いです。あなたの言うことは何でも実行します。衣服を与えて下さい。さもなければ王様に報告します」

福德吉祥すぐれたクリシュナは答えました。

「もしも召使いであると言うなら、私が言うことを実行しなさい。ここへ登ってきて自分の衣服を受け取りなさい」

そこで冷たさに震えて娘たちは皆両手で下半身をおおい隠して、水中から出ました。

清らかな心で喜んでいる娘たちを見ると、彼は喜び、衣を肩にかけてやり、ほほえんで言いました。

「あなた方は誓い堅固ですが、裸体のまま水中に入りました。これは神々を軽蔑することです。その過失の償いのために、額のところで両手を合掌し敬礼しなさい。そうすれば衣服は取りもどせます」

牧草地の娘たちは、裸体の水浴は警戒を効果のないも

のにすると考え、その報いを求めて、クリシユナの前で敬礼いたしました。

娘たちが敬礼するのを見ると、クリシユナは満足し、哀れんで、衣服を娘たちに渡しました。

実に彼女たちは、だまされ、恥らいを捨てさせられ、あざ笑われ、戯れのようにふるまわれ、衣服を奪われました。しかしこのような時でさえもクリシユナを怒りませんでした。むしろ愛する人との触れあいに満足していました。

自分の衣服を着けおわって、なおも愛する人との出会いに執着する娘たちは、彼に心を奪われ、恥かしそうな眼でみつめたまま、動くことができませんでした。

クリシユナは自分の足に触れたいという望みによって、娘たちが誓い堅固であることを知り、彼女たちに意見しました。

「あなた方が私を尊敬していること、私に望みがあることを知っている。それを認めよう。今やそれは実現されたものとなろう。

私に心が夢中になっている人にとって、その望みは世俗的な欲望のために役立たない。ちょうど火で焼かれた

り、熱せられた穀物の種が若芽を生じないように。

すでにあなた方は目的を成就しました。牧草地へ帰りなさい。また私と楽しみましょう。この警戒のために貞潔なあなた方は女神の崇拜を行いましたから」

福徳あるシユカは話を続けました。

クリシユナに意見され、望みをかなえた娘たちは彼の蓮のように美しい足を思い浮べつつ、ようやく牧草地へ帰りました。

さて一方クリシユナは牧人たちに囲まれ、兄ラーマとともに牛を追いながら、牧草地より遠くへ出かけました。

激しい夏の太陽の日ざしの中で、森の木々が自分の影で日傘の形をつくっているのを見て牧人たちに言いました。

「ごらんなさい。これらの福々しい木々をそれはまるで他人のためにのみ生きるような様子である。みずから風雨、寒さ熱さを克服しなお私たちを風雨からさえぎっている。

実にこの木々の誕生は最もすぐれている。一切の生命あるものを打ち出す源であり、だれもそれに失望してそ

を去らないのであるから。ちょうど乞食が善き人に失望せず、立ち去らないように。

葉、花、果実、木蔭、根、樹皮、樹枝、樹液、香、灰、骨、若芽などによって他者の望みをみたす。

それと同様に他の人々に、生命、富、知性、言葉によって常に慈善を実践することは、その人にとってこの世は生まれた意義があるものです」

と言って、若芽、房、果実、花の集りで枝を低く下げた木々の中を通過して、ヤムナー川へ行きました。

夫、兄弟、親類、息子たちにひきとめられても有名なクリシュナを、長い間聞くばかりで心に保っていた婦人たちは、

無憂樹の若芽に飾られたヤムナー川の近くの林に、牧人に囲まれ、兄と共に歩いている彼を見ました。

彼に心が夢中である婦人たちは、最愛の人がそこに居ると聞くだけで耳がいっぱいになりました。また目という穴を通して彼ら心の中に導き入れ、長い間抱きしめて、これまでの苦悩を離れました。ちょうど我執をもつ

た人がブラフマンと一体となることで分別を離れるように。

あらゆる願望を捨てて自分に会いたい一心で婦人たちが来たことを知り、クリシュナは笑顔で言いました。

「神々を崇拜する処へ帰りなさい。そこではあなたの方の夫であり、一家の長であるバラモンたちが、あなた方と共にサットラ祭を行って利益をもたらすでしょう」

バラモンの妻たちは答えました。

「私たちを傷つけることを言わないで下さい。むしろあなたの足元という心の伝所へ私たちが来た事実をお認め下さい。私たちはすべての親類を捨て、トユラシー草の聖なる紐を髪に結えたいと願って、あなたの足元に来ました。」

夫、両親、息子また兄弟、親類、友人は私たちを歓迎しません。どうして他の人が、あなたの足元へ、みずから倒れ伏した私たちには、あなた以外の所へ帰るという所は他にありません。そうして下さい」

福德吉祥あるクリシュナは言いました。

「親、兄弟、息子、夫はあなた方を怒らない。むしろけなげな行いによって、世の人々は私に遣わされた神々

であると考ええるでしょう」

この世で、ただ単に身体を触れることは人間相互の愛情や結びつきを高めることにはなりません。私の身体に直接触れなくとも、私に心を集中して思念する人こそ、私を得たことになるのです」

さて一方バラモンたちは、クリシュナ、ラーマの頼みを破ってしまったと思出し、誤りを犯して、後悔しました。

婦人たちのクリシュナに対する尋常でない熱烈な心情をみて、その心情にうたれ、後悔して、自分がいやしいとののしりました。

「見たまえ。婦人たちのクリシュナに対する甚しい情熱を。それは家柄という名、死という枠を打ち破る。

あのクリシュナは、まことにヨーガの王、ヴィシュヌ神そのものである。彼がヤドウの家柄に誕生したと聞いていたが、愚かにも我々は気がつかなかった。

しかし我々は恵まれている。我々には彼女たちがいたのだから。彼女たちの熱烈なる帰依の心によって、我々にもヴィシュヌ神に対する敬虔な不動の信念が生じたのだから。

他ならぬかの神は、神の幻力によって心を惑乱され、その威光にも気づかぬ我々の過失を許してくれるだろう」



【解説】

以上はインド教徒の聖典『バーガヴァタ・ブラーナ』(第十卷二・三章)の一節である。本聖典はインド教の中、ヴィシュヌ神を信仰・崇拜する功德を説く。全体は十二巻、約一万八千の詩節から成る。およそ十世紀頃の成立である。

翻訳にあたっては逐語訳をさけ、また理解しやすいよう適宜字句を補い、固有名詞は統一した。紙面の都合で大はばに割愛せざるをえなかったが、物語りの展開は理解いただけると思う。

主人公クリシュナは邪悪を滅し正法を守るため、この世に化現した英雄である。彼の勇敢な行為を語る伝説・物語りはインド人に親しまれており、右の引用のように

クリシュナと婦人たちとの物語りの中に、聖典は、信仰とは何かを説きあかし、人生の指針を与えている。特に神に近づく信仰の道は、ただひたすらに心に思念する熱烈な婦依の心であると強調する。それは、母親がわが子を感じるような心で、また娘が愛人を慕う心で、神を礼拝思念すれば、神の恩恵に与かることができると平易に説きあかされている。

ところで仏教にも念仏という行がある。阿弥陀仏の名号を一心に唱え心に念することは、インド教徒のそれと相通じたものがある。

なお身近かなインド教聖典の翻訳として次のものがある。

- 『バラモン教典・原始仏典』世界の名著1 中央公論社。
『ヴェーダ・アヴェンスタ』世界古典文学全集3 筑摩書房
『インド集』世界文学大系、筑摩書房
『ヒトローパデーシャ』岩波文庫、岩波書店
『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫、岩波書店
『シャクンタラー姫』岩波文庫、岩波書店

『サンスクリット文学史』（辻直四郎）岩波全書、岩波書店

○ご案内

秋風のそちこちに吹きはじめの折柄、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて本誌でも、諸方面より要請もありまして、「浄土俳壇」のコーナーを設けることになりました。選者には、ホトトギス同人の一田牛畝先生（福岡市正定寺住職）をお迎えして、誌面の一層の充実をはかりたいと思います。

皆様からのふるってのご投句をお待ちします。

◇要項

一、ハガキ一葉に一句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛

想

随

緑蔭法談(一)

伊藤義
藤一

はじめに

能化の身である私共僧職は、臨終の夕に至る迄「自信教人信」と仏意を躰して挺身することは、今さら申すまでもない。四六時中折に触れ機に臨んで、教化に専念し、一挙手一投足これすべて仏の説示に叶う言行であらねばならない。そのように、心密かに自ら言い聞かせながらも、日頃、信徒に接しては阿諛迎合でなくとも、いつしか雑談に陥り、世間話しに花を咲かせて終ることは、心ならずもしばしば体験するところである。

対話対談中に相手につられながら、それすらもなく、口を挟むでもなく、何気なくすらすらと話題の途切れに話の続きにふさわしく、一片の法話を、挿話態に語り続けることは、不知不識の間に、法への親近感を与え、温かい法悦に浸らしむるものである。老朽浅学不敏で誠に非礼不遜の儀ながら、この禿筆の一編を御笑覧賜わらば望外の倖である。

○柳は柳

加賀百万石の領主、前田家三代利常侯が、参勤交替で江戸出府の時のことである。詰所で諸大名との話題の中で、当代随一の女性俳人加賀千代女のことを耳にしたが、侯は千代女を知らなかった。帰城後家人に命じて千代女を探させたところ、はたして金沢に在住していた。

千代女の句に、亡くした一子を憶って、「とんぼ釣り今日はどこまで行ったやら」や、夫に別れてからの作である「起きて見つ寝て見つ蚊帳の広さかな」などの句は、俳聖芭蕉にも比ふべき、女流俳人として大変な評判

であった。それで前田侯は、ただちに駕を差し向けて居城に迎えたのである。

城中では大変な騒ぎで、さぞかし人情味豊かな、容姿端麗な美人であろう、あるいは優しき姿であろうとか、ことさらに女中共の憧れの日であった。

駕から下りて玄関へ、案内役に従って廊下をしづしづと奥へ通されたが、とても大兵肥満で、しかもすこぶる醜女であった。女中共はクスクスと笑ったり、囁やき合ったりしたという。それが千代女の耳に入ったのか、奥へ通ずる廊下で、「一と抱えあれど柳は柳かな」と口ずさんだとのことである。

また、千代女が年頃になった時に縁談がまとまり、その奥入れの時には、「洪かるか知らねど柿の初ちぎり」と詠んだこともあり、女の誇りと嬉しさ、つつましさが、こめて詠まれている句もある。もちろん、「朝顔に釣瓶とられて貰い水」の句も有名である。

○一万円札

近頃は物価が上がる一方であるが、物価の上昇にはい

ろいろと原因もあるが、一面では貨幣価値の低下とも考えられる。かつては、私共の手許にはあまり手廻らなかつた一万円札が、チョイチョイとお目にかかるようになった。

百円札や千円札に比べて形も大きいし、誰のデザインか知らないが、外国の紙幣に比べても、とても立派である。

左り側にはアラビア数字で0が四つも並んでいるし、右の方には両手で笏を持ち冠を着けられた誠に気品の高い聖徳太子のお姿があり、思わず拝む心地でつくづくと眺めると真中に何にも印刷のない丸い空白があるので、不思議とすかして見ると立派な八角堂の御殿が写っている。これが夢殿の景観である。

聖徳太子は用明天皇の第一皇子で、叔母さまにあたる推古天皇の皇太子となられ、摂政の宮として政務を執られ、政治の中心を仏教に求められ、四天王寺の建立や、社会救済事業あるいは中国唐への勅使や、留学生の派遣もなされた。そして二十九才の時に斑鳩宮を造られ、お経の講義や、憲法の制定等をなされ、飛鳥文化を創られ、国の興隆の基礎を固められたのである。百年後の紀

元七三九年来斑鳩の宮の跡に、八角堂の御殿が造られ、等身の救世観音を祀って夢殿と呼んだのである。

現在も飛鳥文化の重要文化財として残っているのである、単なる冷たい歴史的建築物と受けとらないで、我々の生活に密着したあたたかい、お仏壇として受けとめ、かの一万円札が手許に届いたら感謝の気持ちで、仏壇に拝礼するのと同様に受けて頂ければ、お金を大切に思う思いもさらに深まるものであらう。

○ 鑄懸け屋さん

私共の子供の頃には「鑄かけやさん」と呼ぶ商売があった。鍋や釜、湯沸しや金だらいい等の穴あきや水洩れを修繕してくれた。現在のような使い捨て時代では、廃物利用とか、物を大切にするという気風がすたれたので、鑄かけやさんもなくなり、その名前すら現代の人々はご存じでありますまい。この家業は到るところにあって、大抵は夫婦で、お婿さんは担いだ荷物を下して、路傍や神社の境内、あるいはお寺の門前に陣取っていた。またお嫁さんは「鑄かけのご用は」と、家々を廻り注文を受

けるのであった。

落語にも「鑄かけ屋」というのがあるが、轡(ふいこ)のぐるりに大勢の子供が集まる。その子供たちとのやりとりを面白くおかしく取扱った話である。大抵の鑄かけやさんは一定の住所を持たず、家財道具などもなく、轡き炭、金火箸等の工作道具を天秤棒で荷って歩き、一日の仕事が終ると、そのところの安宿に泊り、また翌日は次の町や村を廻り、必ず一定の期間を置いて、一年とか半年位には必ずまた巡廻して来た。鑄かけやさんは必ず夫婦づれであったから、それで夫婦づれを「いかけ」とか、「いかけづれ」とか申して、「昨日は天神さんへお参りでしたそうだが、いかけでか」などといったものである。

戦後の現在は何もかも変り、教育方針も知育と体育、すなわち知識の涵養や体位の向上はすこぶる進んだが、徳育の方は欠けているように思われる。明治、大正、昭和と経てまいった私共から見ると、「夫婦相和し」などとは忘れ去られ、何もかも腐ったように思われるのである。



念佛ひじり三国志

(罫)

一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

天満はそのころ「渡辺ノ津」とも呼ばれた。紀州路への屈折点にもあたった。

高野山へは生駒山塊を縦走する陸路があったが、熊野詣では天満で下船し、一里ごとに設置された王子社を巡拝しながら、和泉、紀州を南下してゆくコースしかなかった。王子社は熊野本宮に至るまで九十九社に及んだ。

熊野参詣は物見遊山の旅ではなかった。道中がこれすべて、精進、修法であった。

参詣者は渡辺ノ津にある精進宿で身心を淨め、見送り

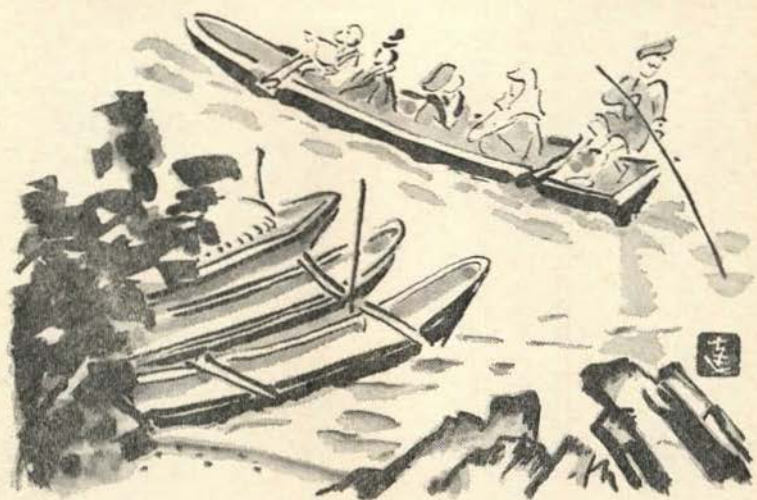
の家族ともそこで別れる。薬沓（ワラグツ）や行纏（ハバキ）という巻き脚絆を付けた。修験服で身を固め、全身まっ黒な装束になって紀州路を南下してゆく。

「蟻の熊野詣で」と呼ばれた。

道中では「道言」（ミチゴト）という使用してはならぬ言葉さえあった。きびしい禁制の旅であった。

奇怪なのは帰路である。無事に熊野三山の参詣を終え、再び渡辺ノ津に戻ると、人々はいっきよに解放される。修験服を脱ぎ捨てて淀の大船に乗船すると、たちまち酒宴だ。久々で再会した家人と歓楽を共にする。なかには淀川沿城の遊里へ走る者もあった。

＜津ノ辺国津撮＞



前号のあらすじ

關白九条兼実邸での法話を終えて、今その成り行きを安樂たちの求めに応じて、法然上人は夜の更け行くまで話していた。場所は東山大谷の禅室中ノ房。その法然の話に耳を傾ける一人の男——床下の暗がりじっと潜んでいたのは、天野四郎。鋭い聞き耳が自慢の怪盗、河内の耳四郎であった。「盗賊がとどなる念仏も、法然ご房がとどなる念仏と同じだ」と頭上の人は話している。耳四郎は強い衝撃を禁じえなかった。

思えば、この河内の耳四郎。こざかしい盗っ人稼業の限りを尽し、悪女真々奈と、その情夫の砂金商人や若い従者時ノ介を殺し、真々奈との愛欲生活に身を没した日々もあった。今、法然の穏やかな話のうちに、みずからの生涯の大きな転機を迎えようとしていた。

江口、神崎、蟹島など遊女がたむろする宿が沿城の摂津には散在していた。この国に初めて出現した遊里である。

きびしい禁制の往路と、とことんハメを外す帰路。この国の人間と宗教との奇怪な関係を明示している。呪術の神々は猛々しく君臨し、人間は神々のご機嫌を禁制の旅で取り組んだあと、心おきなく享楽にふけるのである。

津ノ辺は現在の大阪東区、天満橋と天神橋とのなか

ほどを指したと言われる。この禁制と解放とを混血させた盛り場であった。

全身がしびれ行動不能におちいった、と見せかけた天野耳四郎は、真々奈が姿を消すとがばつと起き上がり、夜道を天満へ急いだ。

耳もそうだが盗賊の条件として健脚も必要だ。耳四郎の快脚は抜群だった。渡辺ノ津へ到着したが乗船場のあたりに真々奈の姿はなかった。

片目の仲買人だけがうろついている。

耳四郎は彼らを監視しつづけるための妙案を思いついた。乗船場の前に立ち並ぶ精進宿の一軒へはいっていった。

「おい、一式をそろえてくれ」

「お泊りなら明朝までにそろえておきます」

宿の者は不審の眼を向けた。熊野参詣への旅立ちに遅すぎる刻限だったからだ。

「いや、夜道をゆく」

修験服一式がととのえられた。耳四郎はたちまち山伏姿に変身した。砂金をひと掴み、宿の者に与えた。

淀の大船には熊野詣で往路の禁制をそのまま守りぬい

ている少数の乗客もいた。彼らは旅の風塵にまみれた修験服でつましく船底に坐っていた。耳四郎はその群れにまじりこんだ。すでに片目の仲買人が真々奈と手を取り合って乗船したのを確認済みだった。

彼らは上部の個室で明日を夢見て、酒を喰らい、身体を合わせて、眠りこけているであろう。その明日の夢がどんなものになるか。耳四郎はせせら笑って、膝を抱いて眠った。

だが、耳四郎がえがいた復讐、天誅は魚餅に帰した。真々奈や仲買人よりひと足に山科の山中へやってきて、樹蔭に身をひそめたまでは筋書どおりだったが、二人が砂金の埋蔵場所へ近づいたとき、事態は急変した。耳四郎がしゃがんだ樹間と反対の方角から数人の男たちが飛び出してきて彼らを取り巻いたのである。

「とうとう現れたな」

「この人殺しどもが」

服装や口のききようから検非違使の役人どもであることが、すぐにわかった。

張りこんでいたのである。

耳四郎は腋下が冷めたく濡れるのをおぼえた。

ひと足先にこの地点へ到達した自分が、砂金の埋蔵場所へ近づいていたら、捕縛されるのは自分ではなかったか。

それにしても検非違使の役人どもはどこから埋蔵場所を探知したのであろうか。

あの日、兇行の現場を通りすぎたたびひと組の通行者、父子づれの姿を思いうかべた。殺人を知った検非違使庁はくまなく調べ上げ。この通行者をさがし出したのにちがいない。もちろん砂金商人の側からも届け出があったのであろうが。

真々奈と仲買人への復讐、天誅は役人どもの手で果たし終えたはずだが、耳四郎には深い衝撃が残った。せっかく埋蔵しておいた砂金はとくに掘り出されてしまったはずだからである。

失意のあまり、それを確認する気力もなかった。

真々奈たちが処刑される現場を、耳四郎は六条河原で目撃した。罪状の詳細と処刑日や制限をしたためた高札が辻々に出たのである。

女盗賊の処刑は珍らしかった。六条河原には定刻前から群衆が埋めつくされた。耳四郎もそのなかへ何喰わぬ

顔で立った。

やがて二頭の馬が堤から降りてきた。役人どもが取りかこみ、馬上には真々奈と片目の仲買人が縛された姿で、ぐったりと横たわっていた。

河原へ引きずりおろされた途端、俄かに真々奈は絶叫しはじめた。

「妾は何もしていない。やったのは、みんな彼奴だ。彼奴が人を殺し砂金を奪ったんだ。彼奴なんだ。彼奴……」その彼奴は此処にいるぞ！

不敵な笑みを面上にえがいている自分を知ったとき、耳四郎はおのれの左半身がうちふるえるのをおぼえた。

何という男だ。この極悪人奴！

名乗り出て彼らと一緒に処刑されぬのか。真々奈はともかく、あの片目の仲買人なぞこの犯罪とは殆んど無縁ではないか。女の口車に乗って砂金の埋蔵場所へ近づいただけなのである。

耳四郎への呪いを連呼する真々奈に比べ、仲買人は終始うなだれたままだ。ひとことも発しない。

根っからの善人にちがいない。

いよいよ首斬り役人が両者の背後にまわったとき、

六、七歳の男児が群衆のなかから駆け出した。片目の仲買人の膝に取りすがった。

「おう、坊、来てくれたか」

「いやだよ。早く家へ帰って」

「お前に会えただけで父さんは嬉しい」

父子の会話が、耳四郎にははっきりと聞こえた。

別な役人が男児を見物人のなかへ連れ戻した。男児を抱いた女。仲買人の妻であろうが、涙に濡れたその細面を、耳四郎は美しいと思った。

首斬り役人の太刀がふりおろされる。

仲買人の首は簡単に前へ落ちたが、なぜか細い真々奈の首は胴体から離れなかった。首斬り役人は位置を移動させると、こんどは太刀を掬うようにして斬り上げた。

黒髪がもつれた女の白い首は鞠のように宙を走った。

群衆は恐怖の叫び声をあげて眼をおおうた。

耳四郎は真々奈の首が河原に落ちるところまで、身じろぎひとつ打たずに凝視していた。

いや、身じろぎひとつ打たぬのは右半身で、左半身はわなわなとうちふるえていたのだ。

俺の身体はまっ二つなんだ。常人と悪党とが両棲して

いる。

その不可解さに耳四郎は茫然自失するのであった。

二

「こともあろうにわしは、あのあと片目の仲買人の妻子を追った。女房が結構いけそうな女だと眼をつけたからだ」

中ノ房の床下で天野耳四郎は独白する。

手ごめ同然に女房を犯した。

だが、その女、捨てがたい情味があった。現在でも同棲している。母子を養うために耳四郎は盗みを続けている。

女を愛し、男児をもわが子のように愛している。

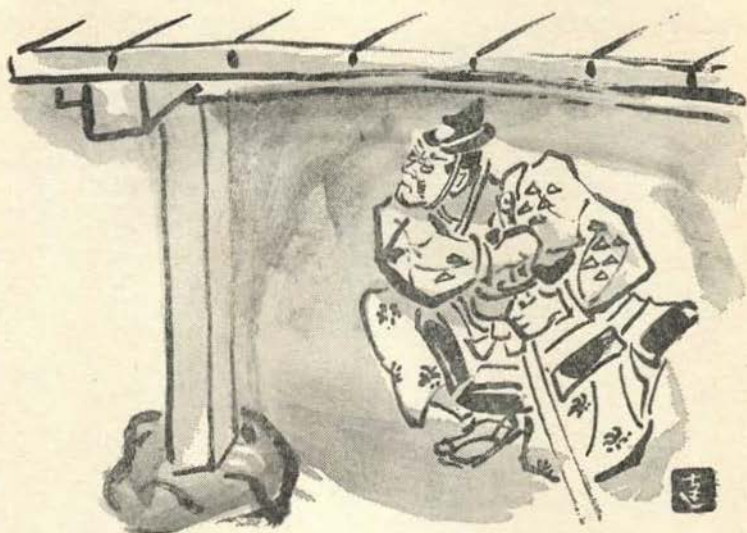
瀆罪のためか。それとも耳四郎の右半身に残る善人の性か。耳四郎にはわかつている。

独白をくりかえすうちに耳四郎は居たたまれなくなつた。ころげるように床下から這い出していった。外縁まで出ると、雨戸を烈しく叩いた。

「どなたじゃ」

門弟の声がする。

＜中ノ房床下の耳四郎＞



「開けてくれ。そこなお聖人と話をしたい」

「だからどなたかと訊いているのじゃ」

「盗賊でござる」

「盗賊……」

室内の声が息を呑んだ。

「開けてやりなさい」

物静かな声が、やがて雨戸越しにひびいた。さっきから説法していた法然の声であった。

耳四郎は座敷へあがりこんだ。

法然がいる。俊乗房重源も怪訝な眼でこの深夜の闖入者を見た。

「盗賊とな」

やさしくたずねてくる法然。

「正身正銘の盗賊、人殺しでござる。じつは今夜……」

と、床下にひそんだ経緯を耳四郎は告げた。此処へこうして這いあがって来ねばならなかったことまでも。

「こんなわしまでが救われるとお聖人はおっしゃった。

真実のこととござるか」

「真実です」

「あなたはわしの極悪ぶりをご存じない。それを知った

ら、あなたの考えをあらためるであらう」

「話してごらんさいとあなたのおかした罪を」

耳四郎は来し方の悪業を洗いざらいぶちまけた。

当然、砂金商殺しが中心になった。

耳四郎の極悪ぶりが頂天に達すると、法然は、

「おお、むごいことを……」

とそのふくよかな表情をしめた。

「あなたもそう思うでしょう。わしにもなぜそんなことをしなければならなかったのか、自分でもわからない。

まだ十歳かそこらの、いたいけない女兒を、鐘楼の上へ連れこんで、全裸にむいて凌辱したことだってある。女兒は血まみれになって泣き叫んだ。わしは犯し終ると、失神した女兒にススキを刺しこんで逃げ降りていったものだ」

「あなたは悪鬼だ」

「そのとおりでござる。こんな悪鬼までも阿弥陀仏とやらは、お救いの手をさしのべられるとおっしゃるのか」
法然の悲痛な顔は、しかしこの瞬間、もとの涼やかな色にもどった。

「救って下さる。まちがいなく……」

「なぜ、なぜだ」

耳四郎は怒号したくなる。

「それが阿弥陀仏の本願だからです。いかなる人間でもお救い下されるのが阿弥陀仏の願いだからです」

「それでは今、わしはどうしたら良いのか。この夜が明けたら、何処へいって何をしたら良いのか」

法然を見つめる耳四郎の眼は真剣そのものだった。

「今、何をなすべきか。それは簡単なことです。あなたは夜が明けたらまっすぐに検非違使の庁へ出頭なさい」

「検非違使の庁へ」

「そうです。これまでに犯した罪業の数々を自白することです」

「すぐに打ち首になるだろう」

「それは当然のこと。打ち首になっても、あなたは救われる。処刑のそのとき、念仏さえとなえたらまちがいない。阿弥陀仏はあなたを浄土へお導き下さるはずです」
「わしにはその点がよくわからない。救いとは打ち首になることも許されるのではなからうか」

「それはまちがいです。他力本願と言うと、ともするとその点で思い違いされる」

法然はゆっくりと重源や門弟たちへ視線をめぐらした。

「阿弥陀仏がお救い下さるのは、往生のことだけです。

それ以外のこと、つまり人間が働いたものもろの業は人間自身が責任を取らねばならない。この人のような悪業には彼自身がつぐなわねばならない。つぐなつたあげく、縛り首か斬首のとき阿弥陀仏は現われて下さるのだ」

「わかった。わかりました」

耳四郎は床を拳固で叩いた。

「おわかりか」

「わかり申した。人間が為したことは、すべて自分でケジメをつける。かりにどんなケジメのつけ方になっても文句は言わない。そしてそのあと、死んでゆくときは阿弥陀さまがお救い下さる、ということですね」

「そのとおり、いかなる人間の人生も、善人も悪人も同じことなのです。いつか一度は必ず死なねばならない。

善業を積んだから立派に往生でき、悪にまみれた生涯を送った者は地獄へ堕ちる。これは間違いだというのです。その善か悪かを誰がどう決定するのでしょうか。善業を積んだにもかかわらず、苦悶のうちで死んでゆく人

だつてある。いちばんいけないことは、その苦悶のなかでこんな結末をもたらしい世を呪ったり、仏を恨んだりすることです。またあなたのような極悪人は、救いのない往生を恐れて、人間としてケジメをつけないで逃げまわる。罪のつぐないを避けようとする」

「そうなんです」

「最後はまちがいに救つて頂くと信じきれたら、人間は精一杯生き抜くことが出来るはずです。獄も処刑も恐れないでしょう」

「恐れません。わしは明朝、まっすぐに検非違使の庁へ出頭します。すべてをぶちまけます。そしてわが手がけた人々のためにも、わし自身のためにも、阿弥陀仏に救いをお願い致しますよう」

「それでよろしいのです。人間が為すべきことと、阿弥陀仏がなされることを判然と区別してこそ他力信仰の出発がある。この点を曖昧にしておくと、すべてが自堕落、享楽になつてしまいます。それにしてもあなたはよくこの席へ出て来てくれました。深くお礼を申し上げます」

法然は耳四郎に向つて頭を下げている。

「なぜ、こんなわしに……」

「言ってみれば悪党の張本人を、わたしたちは眼前に見るのは今が初めてなのです。その張本人に阿弥陀仏がどんなお救いを下されるのか。じつは私自身も今初めてはっきりと確信出来たのです。重源どの、そうでしょうが」

「わたしも思ひは同じことです」

と、俊乗房も深いうなづきをかえした。

勸進第一で生きぬいてきた重源である。大仏復元の資金のために、時と場合によっては相手をだましたり、甘言に乗せたこともあった。本質的にはこれも悪業だった。その悪業は自分みずからの行動でつくなうのである。そして人生のゴールとも言える往生業はすべて阿弥陀仏の救済の手におまかせしてしまうのである。

東山にさわやかな朝が訪れていた。

天野耳四郎は縁先へ降り立った。

「お聖人さま。では、いってまいります」

「もう、ゆかれるか」

「はい検非違使の庁で正しいお裁きを受けてまいります」

「それがよろしい」

「当然、処刑されるでしょう。その折はお聖人も阿弥陀さまへお願して下さい」

「もちろんです」

「皆さんも……」

晴々とした表情で耳四郎は、重源以下の門弟たちに別れを告げるのであった。

三

天野耳四郎は検非違使庁の前庭で長い時間待たされた。取調べの役人がなかなか出勤して来ないからである。ようやく山羊ひげに赤烏帽子を頂いた老人が耳四郎の面前に現れた。

「いったい何の訴えか」

老役人は高い床上から耳四郎を見おろした。

「手前は極悪人でございます。数々の悪業を働いてまいりました。いまその逐一を申し上げますからお聴き取り下さい」

まず山科で砂金商とその手代を殺し、奥州からの砂金を奪って隠匿した罪状をことこまかに語った。

「待て待て」

と、老役人は一件に関する書類を取り寄せた。

耳四郎の告白を聴取し終えたと、うるさげに言った。

「今更何を申すか。すでにその件は片づいておる。犯人である仲買人と砂金商の妻は自由にもとずいて六条河原で処刑し終った」

「手前もそれは存じておりますが、女は手前と共謀しましたが、仲買人は女にたぶら化されただけでむじつでございます。真犯人はこの手前で」

「な、なにを申すか」

老役人は怒り出した。

「事件の真相を申上っているのです」

「黙れ。この一件は落着いておるのじゃ。お上のやることが間違っていたと申すのか」

「間違いでございます」

「黙れ、黙れ。わしらのすることに絶対に間違いはない」

老役人は耳四郎の告白に耳を寄せようとはしないのである。

こんな調子で、耳四郎の訴えはすべて却下された。殺しも盗みも、役人はどれ一つとして耳四郎を犯人にはし

てくれないのである。

「この狂人奴が。いっばしの悪党ぶって、功をひとり占めにしようとする」

殺しや盗みが「功」というのも面妖な話であるが、すでに裁きのついた事件を掘りおこされるのを不快がるのは昔も現在に変らぬ役人氣質と言うものであろう。

結局、耳四郎が受けた罰は、お上を騒がせたという理由で管刑五十だけであった。

まっ赤にむけた尻を撫でながら耳四郎は検非違使の庁をあとにした。

怒りが全身をおおうていた。

その怒りは、苛酷な管刑へ、ではない。世の不正への怒りであった。

数々の悪業をおかしたれっきとした真犯人が自首して出たというのにこれを裁こうとはしない役所。この社会の仕組みへ向けた怒りであった。

耳四郎の足は東山へ向った。

法然と再会して、その憤懣の情を訴えた。

「しかし世間とはそういうものです」

法然はおだやかに説得した。

あなたは法の裁きさえ受けられぬほど罪深い人だ、とも言った。

「法の裁きを受けられなかったら、どうすればいいんですか」

「自らの手で、一つ一つつくなつてゆかなければなりません」

「どう、つぐなうのですか」

「善なることのすべてを為すことです」

「善なることのすべて……」

天野耳四郎はその後、東国へ下っていった。片目の仲買人の妻子が一緒だった。

河村という山麓に草庵を結んだ。三人でせっせと畑を耕作した。主として芋を作ったと言われている。

念仏芋、と称して耳四郎は作物を毎日持ち出して街道筋へ並べた。道ゆく旅人に呼びかけた。

「念仏を一度となえたら一個これを進ぜよう」

「ただくれるのか」

「もちろん、ただです」

「なぜ念仏をとないたら？」

「人間が一人、救われるからじゃ」

「念仏一度で。人間が一人、救われるのか」

「そのとおり」

自ら手にかけて被害者の冥福は言わずと知れたこと、過去の自分と同じように悪事を働く者が、いざ往生のおり、阿弥陀仏の救いを得るように、とその念仏へこめるのであった。

この贖罪懺悔だが、後年の念仏者はとすると軽んじがちになる傾向がある。絶対他力の思想において、つぐないや懺悔の行為は自力的であつて背反だと退けようとする者さえいる。

これは、絶対他力の言葉に陶醉したたいへんな誤謬であらう。

生きてゆく上でのすべてを阿弥陀仏の慈悲にすがろうとする貪瞋痴以外の何ものでもない。

阿弥陀仏は往生業こそ本願とするが、人間の生きてゆく業なぞとは無縁なのである。それはすべて人間がやることであつて、阿弥陀仏にはかかわりはないはずである。

念仏を熱心となえることで病気が治ったり、金が儲かったり、福運にありついたり……これではその空念仏

は最も下劣な自力行ということになるであろう。

自ら大悪人と称した法然の言葉に深い懺罪と懺悔がこめられている事実に気づかねばならない。

ところで教阿弥陀仏と称した天野耳四郎は、ひどい熱病にかかり、河村の山麓で臨終を迎えた。

まっ赤に腫れあがった顔の奥で、彼は最後まで涼やかな眼をみはっていた。

「苦しいでしょう」

妻がなぐさめた。

なさぬ仲の男児もせつせと冷水で顔を拭いてやる。

「なあに、わしに苦しめられた人々に比べたら何ほどのこともない」

耳四郎はかすかに笑った。

そして、

「どうやらわしにもやっとお救いのおかげが近づいたようだ」

念仏を口中でくり返すのであった。

四十八巻伝はその模様をこう綴っている。

教阿、カノ河村ニクダリテ住ミ侍リケルガ所勞ツ

キテ終焉ニ臨ムニ、同行ニ語リテイワク。ワガ往生ハ決定ナリ。コレスナワチ深ク上人ノ教エヲ信ズルユエナリ。往生ノ様子必ズ上人ニ参ジテ申スベシト遺言シテ、正念タガワズ合掌乱ルル事ナク、高声念仏数十反トナエテ終リニケリ。同行ヤガテ上洛シテ遺言ノ次第クワシク上人ニ申シケレバ、ヨク心得タリトミエシカ相違セザリケル。アワレナル事ナリ、トゾ仰セラレケル。

(つづく)

新刊『共励五十記帖』

B4判 一六〇頁ヘケース入り

表紙 ワインカラー裂地金文字題字

頒価 一〇、〇〇〇円(荷造送料共)

申込先 〒108 東京都港区三田4-4-17

書道共励会

(振替東京 七七四四七)

二 編集後記 二

○暦の上での「立秋」は、八月八日であったが、やはり実際に初秋のいぶきを感じるのは、九月を迎えてのことである。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」と詠んだ古人の風趣も、この時分のなにかにつけて秋めいてきた新秋の気配を機敏に感じ取ったものであらう。

ふみよむ窓も わが窓

瑠璃の床も うらやまじ

きよらなりや 秋の夜半

月はあるじ 虫は友

〔殖生の宿〕より

これは、里見義の心暖まる訳詩であるが、机辺の灯影（はかげ）に、さやかな秋の夜風を感じながら、ふと私もあてどなき方へ心を向けてしまう。初秋の一夕、月と星と虫の音のすだく世界に、われを忘れて休んでいるのである。

松虫に恋しき人の書斎かな 虚子

待宵や恋しき人の窓のかげ ゆう一

○NHKと放送者の方々のご高配を得て、誌上転載させていただいている「人生読本コーナー」の評判が高い。やはり、それぞれの道での貴重な経験と長い人生航路を経てこられた良識は、私たちの心を深く感動させ、また私たちが汲み取らなければならぬ多くの教えを含んでいるのである。読者諸兄のご声援に答えて、本誌もいささかとも読み応えのある雑誌として成長して行きたい。

○また、近時のそうした愛読者からの暖かい便りは、「読者の声」欄に随時掲載させていただくつもりでいるが、これと同時に、近く開設する「浄土俳壇」への皆さまのふるってのご投句をお願いしたいのである。句作についての心得のない方でも、その折々の心境を是非とも句作していただき、本誌の一ページを飾ってほしいのである。細かい要領は、誌面の囲み記事をみていただきたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十三巻 九月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十二年八月二十五日 印刷

昭和五十二年九月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷（株）

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒（二三） 振替東京八一八二一八七番

《出版目録》

浄土宗出版事業協会

種 別	書 名	規 格	定 価	送 料
浄土選書 1	松濤弘道著 『仏教的生き方とは?』 やさしく人生の歩み方を教える理 論と実践のハンドブック	新書判 268頁	480	120
浄土選書 2	石上善応著 『仏像—その語りかけるもの』 わが心の反映としての仏像の美を 見つめる新しい思索の書	新書判 200頁	480	120
美術雑誌	『芸術浄土』② 特集 浄土宗の国宝・魂のふるさと 嵯峨野まほか	B 5 判 120頁	980	160
	『芸術浄土』③ 特集 浄土宗の国宝(鎌倉篇)・ 鎌倉をあるくほか	B 5 判 84頁	880	160
布教シリーズ	① 浄土宗の葬祭 ② 私の一日一言 ③ 法然上人のおしえ	B 6 判 16頁	1部40 300部以上38 500部以上35 送料実費	
	④ 月影の歌(岸信宏猥下著)	B 6 判 32頁	1部60 300部以上55 500部以上50 送料実費	
	『浄土伝燈輯要』全一卷 伝燈諸列祖研鑽の一大集裁として 明治初年発刊の和綴三巻本を一本 としてここに再版	A 5 判 1074頁	7000	280
	ポケット判 『浄土宗寺院名鑑』 本版を携帯用に縮少	A 6 判 364頁	1500	120
	『浄土宗教師必携』 附1977年教師手帳 資格分限ほか取得事項記入欄、主 要宗規宗綱を掲載	A 6 変型判 本草表紙 本体 120 頁 手帳 124 頁	1500 (送料共)	

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗宗務支所内
発行所 浄土宗出版事業協会
電話 (03) 436-3351 振替 (東京) 6-62587